

内蒙古·宁夏回族 自治区



<日程>

- 1 中部発 9:20 CA-860
北京着 ~ 呼和浩特
【所要時間】 中部～北京 約2時間35分
北京～フフホト 約1時間15分

宿泊(フフホト)

- 2 フフホト市内観光
・内モンゴル博物館
・中国古代四大美人の一人・王昭君の墓
・ラマ教寺院・大召寺

希拉穆仁（シラムレン）大草原へ（所要時間：2時間）

- ・遊牧民族の家庭訪問
- ・モンゴル三大競技の「モンゴル相撲、競馬、弓射」の見学
- ・乗馬体験（※別途料金）

★昼食 郷土料理

★夕食 「手八肉」（かぶりつき骨付き肉）

夕食後 民族舞踊とキャンプファイヤー

宿泊(シラムレン)

- 3 早朝、大草原の彼方に昇る朝日観賞（希望者のみ）
その後、バスにて包頭へ
途中、モンゴルのポタラ宮と呼ばれているチベッチ仏教寺院・五当召見学

★昼食 しゃぶしゃぶ料理

夕方、列車にて銀川へ（所要：約8時間）

★夕食 車内

銀川到着後ホテルへ

宿泊(銀川)

- 4 朝ゆっくり出発
銀川市内と郊外観光
- ・タングート族が建てた西夏王国の歴代皇帝の陵墓・**西夏王陵**
 - ・遊牧民族の匈奴ゆかりの**海宝塔**
 - ・西夏王国の文化財が展示されている**承天塔**
 - ・古代遊牧民族に刻まれ、狩猟の様子や動物、神秘的な西夏文字などが素晴らしい**賀蘭山岩画**
 - ・ショッピング

★昼食 郷土料理
★夕食 麺料理

宿泊(銀川)

- 5 銀川郊外と市内観光
- ・銀川国家湿地公園の**鳴翠湖**
 - ・黄沙古渡にて、筏で黄河遊覧と眺望
 - ・**回民族博物館**
 - ・**回郷風情園**
 - ・自由市場
 - ・ショッピング

★昼食 郷土料理
★夕食 郷土料理

宿泊(銀川)

- 6 朝食後、国内線にて北京へ
北京発 16:55 CA-159
中部着 21:00
【所要時間】 銀川～北京 約1時間45分
北京～中部 約3時間

—— 内蒙古自治区 ——



内蒙古自治区 (nèiměnggǔzìzhìqū)

地理と自然の状況

位置

内蒙古自治区は、中国北部の辺境地域に位置し、北東から南西の方に斜めに伸び、東西方向の直線距離は 2,400 キロ、南北方向の最大距離は 1,700 キロで、東北、華北と西北の三つの地区に跨っている。

土地面積は 118.3 万平方キロで、国土面積の 12.3%を占め、各省、直轄市、自治区のなかで 3 位となっている。

東、南と西は八つの省（自治区）に隣接し、北はモンゴル、ロシアと境を接している。国境線の全長は 4,200 キロ。

地形

自治区全体はほぼ高原の地形で、大部分の地域の海拔は 1,000 メートル以上。内蒙古高原は中国の四大高原の中で二番目に広い。

気候

地理的位置と地形の影響により、温帯大陸性モンスーン気候を主とする複雑多様な気候が形成されている。

春は気温が急上昇し、強風が吹く天気が多い。夏は短くて暖かく、降雨量が集中している。秋は急に冷え込み、霜害もかなり早めに発生しがちである。冬は長くて厳寒であり、寒波が襲来する天気が多い。

年間降水量は 100—500 ミリで、霜の降らない期間は、80—150 日で、年間の日照時間は 2,700 時間以上である。

大興安嶺と陰山山脈は、区内の気象の違いを示す重要な自然の分水嶺で、大興安嶺より東、陰山より北の地域の気温と降雨量は、その反対側を明らかに下回っている。

自然資源

動植物

植物は合計 2,351 種余りあり、植生は喬木、灌木、草本植物などからなり、なかでも草本植物の分布面積がもっとも広い。

野生動物の種類も多く、動物類は合計 117 種、鳥類は 362 種で、そのうちの 49 種が国と地区の重点保護動物、10 種余りが貴重・希少動物に指定されている。

水資源

内蒙古自治区の現在の水資源備蓄総量は、903 億立方メートルで、そのうち地表水は 675 億立方メートルとなっている。

区内には大小の河川が千本近くあり、なかでも流域面積が 1,000 平方キロ以上の河が 107 本もある。

湖は 1,000 余りあり、そのうち水面面積が 100 平方キロを超えるものは八つある。

そのほか、区内には治療効果のあるミネラルウォーター源や温泉も少なくない。

区内の水面面積は合計 98.43 万ヘクタールで、そのうち利用可能な淡水の水面面積は 65.5 万ヘクタールで、全国の利用可能な淡水の水面面積の 10.68% を占めている。

鉱産物

鉱床の類型が比較的揃っている。世界で確認されている 140 余種類の鉱産資源のうち、内蒙古には 120 種類以上が存在している。

埋蔵量が中国一と確認されたものは 5 種類、全国ベスト 10 に入っているものは 65 種類ある。

そのうち、希土類資源の埋蔵量は 8,459 万トンで、世界の 80% と中国の 90% 以上を占めている。

すでに確認されている石炭の埋蔵量は 2247.5 億トンで、全国 2 位となっている。

鉄類、非鉄類金属、貴金属などの金属鉱産物および化学工業原料、工業補助材料などの非金属鉱産物の種類も豊富で、埋蔵量も多い。

石油、天然ガスの埋蔵量はかなりのもので、すでに確認されている大型石油ガス田は 13 もあり、石油資源の総量は 20—30 億トンで、天然ガスの総量は 10,000 億立方メートルと推定されている。

鉱産資源の埋蔵量（石油、天然ガスは含まない）の潜在的価値は 13 兆元に達し、全国の 10%以上を占め、第三位となっている。

観光資源

内蒙古は観光資源に富んでいる。

例えば、豊多彩な民族文化、草原の景観、大興安嶺の原生林、黄河の景観、不思議な響沙湾、数多くの湖と温泉、ジンギスカンの陵墓、王昭君の墓、古代の万里の長城、陰山の古寺である五当召、五塔寺、百霊廟、後漢時代の壁画古墳群などの遺跡がある。

環境の状況と対策

特殊な地理的条件がゆえに、自治区のかなり多くの地区の生態環境はかねてから厳しい状況におかれている。

ここ数十年来、温室効果や非科学的開発利用などによって、干ばつや風による浸食、砂漠化、水土の流失がさらに深刻化している。

砂漠化或いは潜在的砂漠化土地面積は、自治区総面積の 60%を占めているばかりか、毎年 67 万ヘクタールのスピードで広がっている。

牧草地帯の砂漠化、退化、アルカリ化によって、ここ数年、砂あらしが頻繁に発生している。東部の大興安嶺山地の水源涵養機能が衰え、松花江—遼河流域で水害が起こる環境的原因となっている。

区内の黄河と西遼河流域区間だけで毎年の土壌流失量は 3 億トンに達し、3 万ヘクタール余りの土地に相当する。

それと同時に、土砂が河床に堆積し、河川の流れが止まることが加速されている。

生態環境を改善するために、内蒙古が西部大開発戦略を実施する「十大プロジェクト」の主要な「生態建設プロジェクト」がここ数年相次いで始動した。

その中には農業区の耕地を森林(草地)に戻すプロジェクト、牧畜区植草休牧プロジェクト、国家生態重点県の建設プロジェクト、「三北」（東北地方、華北地方と西北地方のこと）防護林建設プロジェクト、防砂治砂プロジェクト、大興安嶺天然林保護プロジェクトと生態移民プロジェクトなどが含まれている。

人口

自治区の総人口は 2376 万人。

民族および人口の構成

蒙古族、漢族、満州族、回族、ダフル族、オウソク族、オロチョン族、朝鮮族など 49 の民族からなり、そのうち蒙古族は 397 万 2600 人、漢族は 1874 万 65 万人、その他の少数民族は 90 万 100 人。

非都市住民は 1378 万人で、そのうち農村には 1187 万人、牧畜区には 191 万人いる。

経済

内モン族自治区は全国の鉄鋼、石炭の生産基地であり、製材工業、農産物・畜産物化工、電力、機械製造、化学工業、エレクトロニクス、紡績、製糖、製紙、軽工業なども全国で重要な位置を占めている。

農業・牧畜業が比較的に進んでおり、中国の重要な食糧、食用油、砂糖の生産基地であり、重要な牧畜業の生産基地でもある。

特に牧畜業の総合生産能力は全国の 5 大畜産地区でトップとなっている。

清代には、科挙制とは異なる世襲領主による地方統治が行われた。

1947 年、中国建国に先立ち、自治区に指定された。

フフホト市（呼和浩特）



フフホト市（呼和浩特、hūhéhàotè）は、内モンゴル自治区の省都。

16世紀に築かれた南モンゴルの古都フフホトと、近隣の4つの県、1つのホショー(旗)によって構成された地級市のひとつ。

古都の部分は、同市の市区として位置づけられている。

モンゴル語で「青い城」「青い都市」という意味を持っているので、「青城」と称されたこともある。

また、歴史上、召廟（モンゴル族ラマ教の寺）が多かったので、「召城」とも呼ばれている。

人口は約70万人。

モンゴル、漢、ダフル（ダゴール）、エヴェンキ、オロチョン、回、満州、朝鮮などの民族が住む。

1565年にモンゴルのトメト部長アルタン・ハーンによって、主にトメト部の支配地域に流入した漢人の定住民を居住させる町として建設された中国式の城郭都市バイシン(大板升)

がフフホトの起源となっている。

バイシンとは中国語の「百姓」の音訳である。

トメト部遊牧国家の主要領民である遊牧民は、指導者家系の婚姻や分家などで分割と融合が頻繁な遊牧集団単位の所属意識を強く持ち、本来は漢人式の姓の概念は持たない。

そして移動式住居であるゲルに居住して、都市内の定住用住居への居住からは、閉塞感を強く感じ嫌う者が多い。

漢人居住のために築かれた都市に「百姓」の名称が充てられたのは、こうした本来は漢人式の姓の概念を持たない遊牧民に対して、男系家系を姓で表現し、同姓集団への帰属意識を強めるためである。

なお、中国語の「百姓」は、庶民も姓を持つ漢人の上層民から下層民までを含む民衆一般を指す語であり、農民の意味はない。

1571 年にアルタンが明と講和して順義王の称号を与えられ、国境沿いで貿易することを認められると、明によって「帰化城」の名を与えられたフフホトは、中国からモンゴル高原に流れる物資の集積地となって栄えた。

アルタンは、晩年にダライ・ラマに帰依してチベット仏教に改宗したため、フフホトへは数多くのチベット仏教寺院が建立され、オルドス地方の精神的中心地となった。

トメト部は、モンゴル民族の間で中国貿易の利権を独占したため、その定住拠点であるフフホトは急速に発展するが、1628 年にチャハルのリンダン・ハーンに奪われた。

さらに 1634 年、リンダン・ハーンが病死すると、満州民族の後金がフフホトを占領し、内モンゴル全域を支配して 1636 年に国号を清と改めた。

清は、帰化城の北東隣に「綏遠城」を築き、オルドス地方の防衛を担当する八旗の駐留地とした。

帰化城と綏遠城をあわせて「帰綏」と呼ばれ、清代以降、中央政府の直轄地として内モンゴルの政治、経済、文化の中心地となった。

その後、1913 年に帰綏の行政体が帰化県から帰綏県に改められ、1950 年に市に昇格してフフホト市となった。

呼和浩特料理



フフホト料理は、北方系の料理を主にして、モンゴル料理とイスラム料理の両方ある。主は、やはりモンゴル料理だが、イスラム料理も人気がある。

軽食は、羊肉串（ヤンロウチュアル、羊の串焼）、焼売、羊雑碎（ヤンザースイ、羊のモツ煮込み）、焙子（ベイズ、フフホトのパン）、奶茶（ナイチャー、ミルクティー）、果条（グオティアオ、カリカリした棒状のお菓子）など。

フフホト料理は、焙子、羊の丸焼き、羊のしゃぶしゃぶ、「手把肉」（ゆでた羊の骨付き肉）、羊の腿焼き、稍美（シュウマイ）、攸面（ヨウメン、麦の一種でフフホトの特産物）、馬乳酒、奶茶、麻花（マーホア、中華風おやつ）、饊子（小麦粉をこねて細く伸ばし、何本かより合わせたあと油で揚げたもの）など。

また、フフホト市も走西口（清朝末期民国初期に、山西省祁県の人たちが、貧困さから故郷を離れて、夢を求める）の目的地だった。

そのため山西と陝西からの風味の影響も受けている。

例えば、大召（フフホトで 1 位の寺院）の近くでは、美味しい刀削麺（とうしょうめん、山西省で生まれた麺の一種）、煮魚（水などの中へ魚を入れ、熱を通して魚を煮て柔らかくする調理）などが、人気がある。

羊の丸焼き料理は、内モンゴル地域の名物料理である。

烤全羊は、モンゴル民族の伝統的な料理であり、大きな式を行うときとか大事なゲストを迎える時に食べる料理である。

内臓をすべて取り出した羊の中に、野菜やお肉、調味料を入れ、羊自体を袋のようにして、ひもで縛る。それを、丸ごと火にかけ、こんがり焼けたら出来上がり！

おすすめ料理

一番有名なのは「手把肉」（手で肉をつかんで食べる料理です）と羊の丸焼き。肥えている羊は皮が金色で、歯ざわりがよくて、香りが強く、とても美味しい。

豆知識

モンゴル族の料理は非常に特色があり、大きく分けて、白い食べ物と赤い食べ物の2つがある。

「白い食べ物」とは、牛、馬、羊の乳から作られる食べ物のこと。牛乳から作られるものは上品で、続いては羊乳から作られるもの。馬乳は、主に飲料やお酒の原料で、ラクダの乳は、酒こうじ或いは副薬として使われている。白い食べ物には、新鮮なミルク、ヨーグルト、馬乳酒、奶皮子、バター、奶豆腐（モンゴルチーズ）などがある。

「赤い食べ物」は、羊や牛などの肉を使って作られる肉料理。羊の丸焼き、「手把肉」（手で肉をつかんで食べる料理）、羊肉串（ヤンロウチュアル、羊の串焼）、羊のしゃぶしゃぶなど。

<内モンゴル博物館>



内モンゴル博物館は、フフホトの都心にあり、自治区一級の総合型博物館である。旧館は 1957 年に建てられ、ユニークな形をしている。また、民族特色に富みながらも現代的な意識も高い博物館である。

本館の最上階にある内モンゴル自治区の発展と幸運を象徴する白い駿馬は空の上に疾駆しているかのようである。

新館は 2007 年に建設され、古代生物化石、歴史文化財、民族文化財、そして革命遺跡という 4 種の展示品を大々的に展示し、訪問者に昔から現代までのすべての内モンゴル歴史の脈絡をより分かりやすいように展示している。

それ以外では、新館に今まで一般に公開されることのなかった貴重な文化財を示している。国宝級骨董品の初代の香炉、貴重な「元青花」及び数多くの今まで展示されることのなかった古代の絹製品など。

主な展示物

内モンゴル太古生態環境、地質鉱物資源、古代北方民族史、内モンゴル革命闘争史、近現代の民俗学、北方草原の古代文化

<王昭君陵墓>



市の南 9 キロの大黒河南岸にあり、墓は高さ 33 メートル、漢族スタイルの築山で、敷地は 5 ヘクタールもある。

陵墓の近くには、王昭君に関係のある文物を展示する文物陳列室があり、墓前に董必武の「昭君墓に謁す」の詩碑や、王昭君と呼韓耶単于が馬に乗っている銅像が立てられている。

王昭君は竟寧元年（前 33 年）に、匈奴の呼韓邪単于が和親を求めて入朝すると、みずから匈奴への嫁入りを申し出て、のちに寧胡閼氏と呼ばれた。

彼女が単于に嫁いだおかげで、漢と匈奴が 60 年も友好的に付き合うことができたといわれている。

秋になると、周りの草木がみんな枯れてしまうが、昭君墓だけが依然として濃い緑色で覆われているので、「青墓」とも呼ばれている。

傾国傾城の古代中国四大美女



中国四大美人。
左から、

西施
王昭君
貂蝉
楊貴妃

中国の歴史上において、「沈魚落雁・閉月羞花」と語られる4人の傾国の美女たち。

■西施（せいし）～沈魚～

春秋戦国時代（紀元前770年～紀元前221年）、西施は貧しいたきぎ売りの娘として生まれた。

彼女はその美しさから、越王の勾踐（こうせん）によって、呉王の夫差（ふさ）を油断させるための美女として献上された。

西施に夢中になった夫差は政治をおろそかにし、やがて呉は越に滅ぼされることになる。

浙江省紹興市から車で1時間ほど行ったところに、西施故里と呼ばれる場所がある。

西施の故郷と言われ、西施を祭った「西施廟」、美女博物館「中国歴代名媛館」や「古越台」など、見どころ満載となっている。

■王昭君（おうしょうくん）～落雁～

前漢・元帝の時代（紀元前33～48年）、似顔絵を醜く描かれてしまった王昭君は長い間、元帝に会う機会がなかった。

そして、匈奴の呼韓邪単于（こかんやぜんう）が「漢の女性を妻として迎えたい」と申し出たため、元帝は醜いと伝え聞いていた王昭君を嫁がせた。

後に王昭君の容姿を目にした元帝は、その美しさに目を見張り、後悔の念で激怒したと言われる。

内モンゴル自治区フフホト市には、そんな王昭君の墓がある。

彼女の故郷を再現した建物をはじめ、匈奴博物館、王昭君廟などがある。

王昭君が漢に別れを告げる場面を再現したショーなどが上演され、特に人気を呼んでいる。

■貂蟬（ちょうせん）～閉月～

小説「三国志演義」に登場する貂蟬は、四大美女の中で唯一、架空の人物である。後漢の暴君・董卓（とう たく）の誅殺を行う為、貂蟬は養父の王允（おう いん）に利用された。

王允はまず武將の呂布（りょふ）と彼女を面会させ、呂布を彼女に惚れさせた後、彼女を董卓に渡した。

だが、その後も呂布と貂蟬を度々密会させ、呂布は貂蟬を思うあまり、最終的には王允と結託して董卓を殺害してしまう。

王允は2人の男の間に貂蟬を置き（美人計）、両者の関係に亀裂を作った（離間計）。これが所謂「美女連環の計」である。董卓亡き後、貂蟬は呂布の妾となる。

■楊貴妃（ようきひ）～羞花～

傾国の美女として名高い楊貴妃。もとは玄宗皇帝の息子の妃であった。

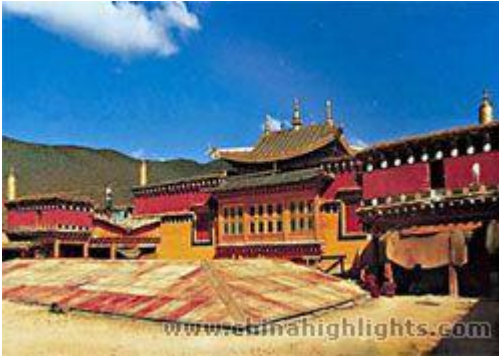
しかし、彼女の美しさに惚れた玄宗は息子から彼女を奪い、やがて後宮に置いた。

楊貴妃に溺れた玄宗は、彼女の一族を昇進させ、ライチを好んだのを知れば、長安の都まで早馬で運ばせ、長安から少し離れた温泉離宮・華清宮では、宴会と舞踊を楽しむ享樂の日々を過ごした。

玄宗はやがて政治をおろそかにし、安史の乱が起こることとなる。

楊貴妃が愛した湯殿、西安の華清池には今も湯が湧いており、温泉に浸ることができる。

<大召寺>



市内の玉泉区大召前街にあるチベット仏教の寺院。
日本の寺院と違い色鮮やかなのが特徴。

大召は中国語で「無量寺」、モンゴル語では「伊克召」といい、大きな寺院という意味である。

1567年から1572年にかけて、モンゴル族の曾長アルタン=ハンは、フフホト（旧城）と弘慈寺の造営を始め、寺は1580年に落成した。
明代には「弘慈寺」と呼ばれていたが、清朝になって「無量寺」と改名されている。

寺院には、純銀で作った高さ2.5メートルの仏像が祭られているので、「銀仏寺」とも呼ばれている。

チベットの三世ダライラマは、自ら大召の銀仏のために開眼式を行ったという。
寺院には宗教関係の文化財が多く、そのうち銀仏、竜彫、壁画は、ほかに例を見ないものとされている。

五塔寺



清代雍正5年（1727年）に建てられ、元々の名称は(慈燈寺)
正式名称を“金剛座舍利宝塔”といい、清代に建てられたチベット仏教寺院の一部。
境内にある5個の小塔を負っている金剛座舍利宝塔が、その名前の由来。

宝塔はもともと慈燈寺と言うラマ廟内の建築物だったが、今はその寺院は何も残らずになくなった。

塔体はその高さが16.5メートル、金剛座式で、塔の基礎、金剛座、塔のてっぺんという三つの部分からなっている。

頂には、小さくて精巧な塔が作り上げられて、その造形が、特殊で、荘重で美しい。

塔体には、浮き彫りの仏像が1560余り彫刻されているので、「千仏塔」とも呼ぶ。
その他に、菩薩、天王、羅漢、天女、神鳥、菩提樹、金剛力士などが彫刻されている。

特に中に安置されているモンゴル文字の石刻の天文(学)の図は最も貴重である。

内部から階段で5つの塔が建っている屋上へも登ることができ、敷地内の花壇や建物、旧市街の様子を眺められる。

万部華嚴経塔（白塔）



万部華嚴経塔は、また白塔とも呼ばれ、呼和浩特（フフホト）市の東郊外にあり、遼の時代の聖宗年間建てられ、その後歴代補修してきたという。

大召のチベット仏教の経典を保管していた建物

白塔は、楼阁式で、れんがと木で作られ、八角7階となり、高さ50メートルある。

塔の基礎部分にはハスの花が刻まれており、塔体の第1、2階の外側には、レンガ彫りの佛像、菩薩、天王、力士などが嵌められており、どれも生き生きとしている。

第一層の内壁には金代の石碑を6枚はめこみ、各層に代々訪れた人々の題記を、漢語を中心に、契丹小字・女真字・ウイグル体モンゴル字・パスパ文字・古シリア字・古ペルシア字などで記されている。

そのうち、1162年の漢語の題記がもっとも古い。

金・元両代の題記の筆者らは、中国の四方八方からやって来ており、当時よりこの地では、地域、民族を越え、往来が盛んであったことが偲ばれる。

塔内に回転式の階段が巧みに作られて上まで登れる。

席力図召



呼和浩特市の旧城の石頭巷にある明代に創建されたチベット仏教の寺院。
席力図とは、モンゴル語で「法座」を表す言葉である。召は寺院。

ダライラマ四世は、幼年時代に、シッディ=カプチュから経典を学ぶとともに、彼に守られてチベットに帰った。

シッディ=カプチュは、ダライラマの法座についてたことがあり、チベット語で法座や首席を「席力図」というので、チベットから戻ると席力図廟と改称したと伝えられる。

清代初期から大規模な拡張工事を行い、徐々に現在のスケールとなった。

牌楼から本堂までが中軸線で、5つの院落からなる。

本堂はチベット様式で、四面の壁に彩色の琉璃磚を使い、屋根に金銅製の宝瓶・法輪・飛竜・祥鹿を配し、赤い出入口や扉の彩色画とあいまって、目を奪わんばかりの絢爛さで、古典建築の傑作。

本堂の前に高さ約 15 メートルの色鮮やかなチベット式のラマ塔が建つ。
内蒙古現存最大のラマ塔で、完璧に近い造形美を誇る。

清真大寺



イスラム教の寺院で、市内、古城の北門の外にある。

清代の乾隆年間、イスラム族が大量に新疆から呼和浩特まで移住してきた時に建設された大規模なモスク。

寺院の正門は西に向って建てられ、その上にはアラブ語で寺院の名が刻まれており、様々なデザインの装飾がなされている。

寺院建築は、主に聖殿、講堂、イスリム浴室などがある。

933年に熱心なイスラム教信者の寄付により、境内に六角4階建ての塔が築かれた。

その造形は簡潔で美しい。アラブ語で書かれた『コーラン経』は30冊収蔵されており、イスラム族にとって貴重な文献資料となっている。

<希喇穆仁草原>



希喇穆仁は、モンゴル語で「黄色い川」という意味で、フフホト（呼和浩特）から北 100 キロのところにある。

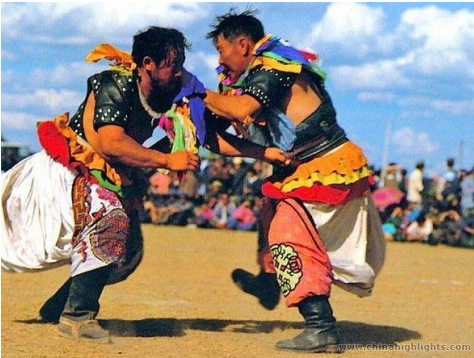
希喇穆仁草原は、俗に「召河」と呼ばれており、希喇穆仁川の近くにある「普会寺」というチベット寺院からとった名前である。

普会寺は、呼和浩特の席力図召 6 世活仏の避暑のための御所として、1769 年に建てられたものである。その建物の装飾美は壮麗である。

希喇穆仁草原は典型的な高原草原で、夏から秋にかけて、草は青々と伸び、花も草原一面に咲き乱れる。その景色は何ともいえず美しい。

ここ数年来、現地政府の投資により旅行施設が充実してきた。

ブフ（モンゴル相撲）



モンゴル民族は非常に広い地域に分布しているため、その地域によって方言や風俗習慣などが異なる場合が多い。

ブフも例外ではなく、威容を誇る鷹の舞で有名なモンゴル国のハルハ・ブフ、勇壮なライオンの跳躍で入場する内モンゴルのウジュムチン・ブフ、そしてオイラート・モンゴルに盛んな種牡牛の角突きを模した古典的なボホ・ノーロルドンなど、実にバラエティーに富んでいる。

その中でモンゴル国と内モンゴルのそれは二つの大きな主流である。

しかし、いずれのブフでも、その身体表現には猛禽や猛獣、強いイメージのある種畜（種馬、種駱駝、種牛）の動きをかたどったものが多く、伝統的な遊牧、牧畜の生業形態との密接な関係が窺える。

また、ブフは古来信仰されてきたシャマニズムとも深く関わっており、祭祀における力士の身体表現は神霊ないしその憑依として認知される場合が多い。

しかし、ブフが近代スポーツへ脱皮していくなかで、そうした象徴的意味と儀礼性が次第に失われてきている。

ブフには土俵がないため、寄り切りなどの技は存在せず、投げや足技が中心である。ウジュムチン・ブフでは、上半身に皮製の半袖のゾドグを着用し、下半身にはだぶだぶの白いバンシル（ズボン）といろいろな模様を飾り付けたトーホー（膝掛け）にブーツを穿く。

足の裏以外の部位が地面に付けば負けとなり、足を取ることは禁じられている。

横綱や大関等に相当する称号制度はないが、強豪力士はジャンガーという様々の色の絹切れを結んだ首飾りを付ける。

力士が年を取り、引退式を迎える際、ジャンガーを故郷の有望な若い力士に譲る。

力士は共同体のシンボルであり、ジャンガーは生命力の宿る呪物であると信じられているので、ジャンガーの次世代への譲り渡しは、共同体の生命力の強化であり、「共同体の再生」儀礼であると言える。

一方、モンゴル国のハルハ・ブフでは、絹製のゾドグとショーダグ（パンツ）を着用し、足取りが認められる他、頭、肘、膝、背中いずれかが地面に付けば負けとなる。

ウジウムチン・ブフは、1978年からその近代スポーツ化を図るための一連の改革を行った。

現在では、内モンゴルという地域を超えて、全国および国際試合を開催するようになってきていて、99年より賞金制度が導入されている。

一方、モンゴル国では、1997年より「ブフ・リーグ」が発足し、有力企業によるブフ倶楽部が急増し、セミプロの力士が出現していて、ブフの商業化が進みつつある。

包頭



包頭 (Bāotóu)

内モンゴル自治区に位置する地級市。

市の名称はモンゴル語で「鹿のいる場所」を意味するということで、中国語では「鹿城」とも称された。

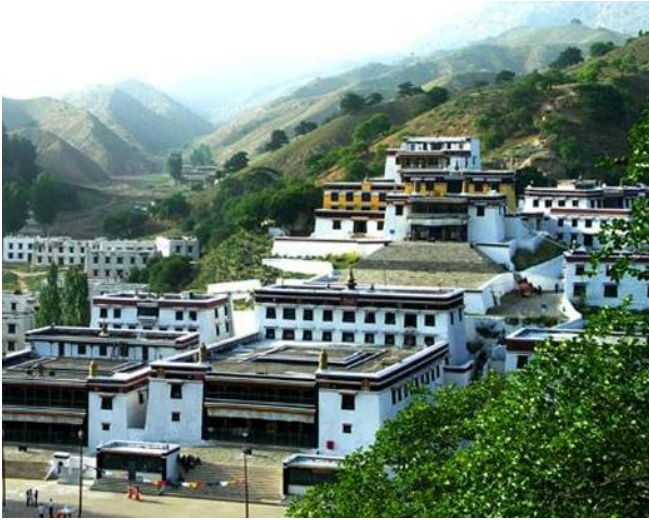
市のランドマークとなっているのが第一工人文化宮門の前の「人」の字形の彫刻で、頂部の三匹の駆け回る鹿が「鹿城」を象徴している。

包頭市の白雲鄂博等では、鉄鋼、レア・アースを豊富に産することもあり、中国国内で重要な工業基地の一つとなっている。

内モンゴルの最大の都市である包頭市の面積は、27768 平方キロメートルで、人口は、249 万人である。

包頭市では、モンゴル族をはじめとして、たくさんの少数民族が住んでいる。

<五当召>



包頭から 70 キロのところであり、内モンゴルに現存するラマ教寺院（チベット仏教寺院）の中で、もっとも保存状態が良い寺院である。

五当召の「五当」は、柳、「召」は廟という意味。
寺院がある場所はもともと柳の木がたくさんあったことから名前がついたとされている。

清の康熙年間（1662～1722）に建てられ、乾隆 14 年（1749 年）に改修され、乾隆帝から「広覚寺」を賜り、改修、拡張を経て、今日の雄大な寺院に至っている。

寺院は、6つの殿堂、3つの府及び陵一つから構成されている。
両側に僧侶の宿舎が建てられ、全部で 2500 軒ほどの部屋が、敷地内にある。
最大の建築物の蘇古沁独宮の中にたくさんの銅の仏像が安置され、五当召の中心的殿堂で、僧侶が集まって読経する場所になっている。

五当召は特権がある寺院として、監獄、法廷まで設置され、武装された寺院でもあった。
廟内に多くの仏教経典、金銀、銅、木などでできた仏像及び壁画が保存され、見ごたえがある。

ジンギス汗の陵墓



内蒙古自治区 包頭

ジンギス汗の陵墓は、オルドスの高原の中南部にあり、東勝から北へ 90 キロ離れている。1955 年に建てられて、全国の重要文化保護財に指定されている。

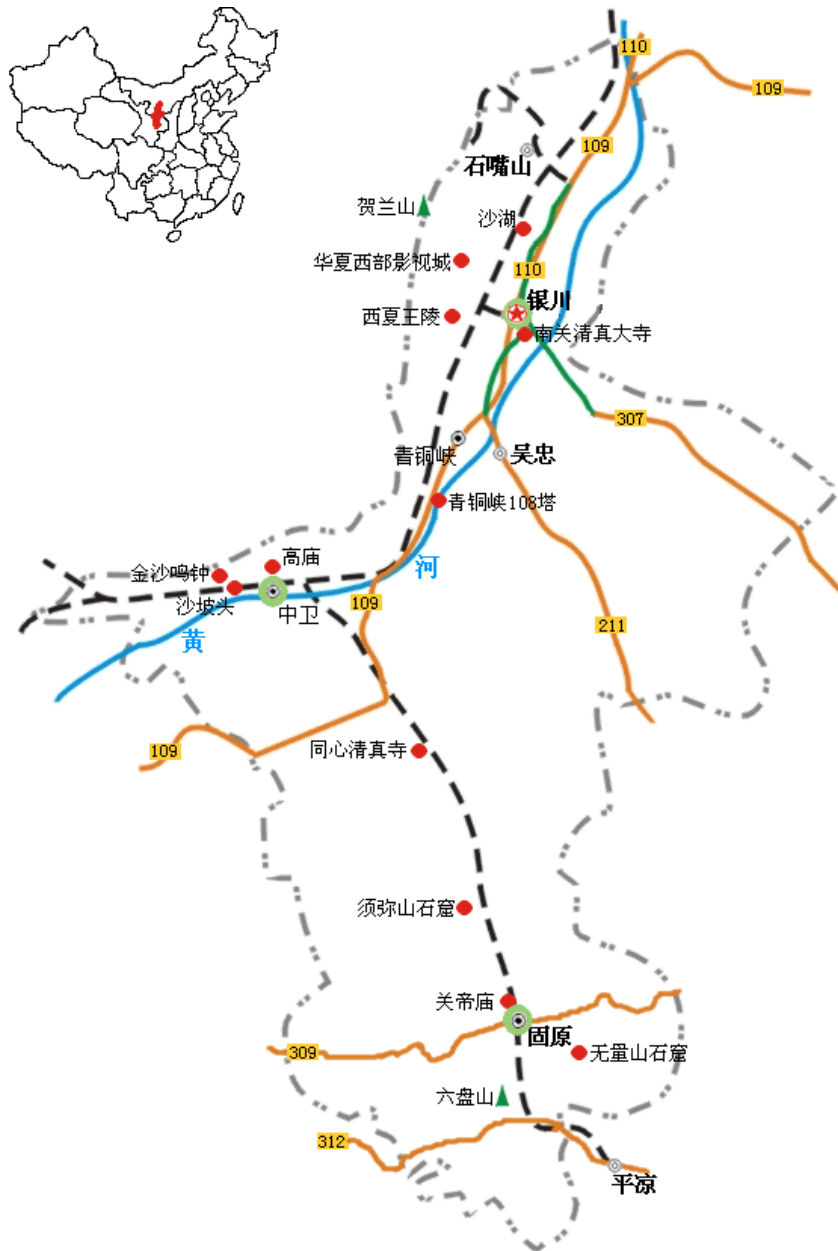
この雄大な陵墓はその敷地面積が 5 平方キロもあり、メイン建築物が三つ連なるパオ式の正殿で、正殿、寢殿、東殿、西殿などに分かれている。

正殿の真正面に、白玉で彫刻した、5 メートルもあるジンギス汗の巨像が祭られており、その後ろに彼の征服した地域の地図が展開されている。

後殿の寢宮に、ジンギス汗と第一夫人、第二夫人、そして第三婦人の霊柩が安置されている。

毎年 3 月 21 日は、伝統の祭祀日とされ、盛大な弔いの活動が行われる

寧夏回族自治区



寧夏回族自治区 (Níngxià Huízú zìzhìqū)

省都 銀川

面積 51,800 平方キロメートル

気候 典型的な大陸性気候で、冬は寒さが厳しく、夏は酷暑となる。

人口 約 610 万人。人口の 3 分の 1 を回族が占める。

その他満州族等の少数民族が住んでいる。

主な都市 石咀山、固原、中寧など。

概要

中国のイスラム教徒回族の中心地。

枸杞子（クコ）、毛皮、甘草、髪菜、賀蘭石を寧夏特産の五宝という。

秦代から建設された灌漑水路をもとに、銀川平原では米・小麦などが作られている。

この豊かな地を『塞北の江南』とも呼ぶ。市内には黄河などの河がある。

歴史

旧石器時代の遺跡・洞溝遺跡が靈武で発見されている。

又、省南部では 4000～5000 年前の新石器時代の農耕遺跡が発見されている。

春秋戦国時代は羌戎、匈奴が分散して居住していた。

秦代に始皇帝の将軍・蒙恬がオルドス地方から匈奴を追い払い、当時「北地郡」と呼ばれていた寧夏で長城を築いた。

この頃、黄河流域で灌漑工事が行われている。

宋代にはタングート族の王である李元昊が西夏王国を築き、この隆盛は 200 年間続き、最大版図は敦煌に及んだ。

1227 年、西夏王国はチンギス・ハンによって滅ぼされ、元王朝が寧夏行省を設置、『寧夏』という名称が登場した。

寧夏とは、『西夏平定、永遠の安寧』という意味。

明代には寧夏衛が設置され、清代には甘肅省に属し、1929 年、再び寧夏省が設置された。

共和国建国後は甘肅省に属していたが、1958 年に分離した。

地理と自然の状況

標高

地形は南北に走る形で、普通の標高は 1100 ㍎～2000 ㍎、最高標高は 3556 ㍎。

自然資源

寧夏回族自治区は農業生産に適する荒地が 71 万 1533 余㍎もあり、全国の農業に適した荒地が 66 万 6667 ㍎を上回る八つの省・自治区の一つに組み入れられている。

開発・利用可能な草地は 300 万㍎に達し、全国の十大放牧地の一つで、黄河の水を利用した灌漑区は衛寧平原とともに 37 万 3333 ㍎に達し、中国の西北地区の四大自然灌漑区の一つ。

豊富な土地資源、完備した灌漑施設および十分な日照条件は、現在の農業の優位のための確固とした基礎となっている。

灌漑区の生産水準はかなり高く、いろいろな農作物と野菜、果物の栽培に適し、スイカ、リンゴ、ブドウの糖分含有量は中国中央部の中原地区より 15－20%高い。

稲の一毛作単位面積収量は 700 ㍎に達し、西北地区でトップを占め、全国の 12 の商品食

糧生産基地の一つで、国の「二高一優」（高収穫、高効率、優良品質）という農業モデル区の建設に力を入れている。

農業に占める牧畜業生産の比率は 29%。水域面積は 8 万 2000 畝に達し、水産養殖可能な水面は 1 万畝に達する。

ソウギョ、レンギョ、フナ、コイとエビ、シナモクスガニなどの養殖を主とする水産業の発展の潜在力は非常に大きい。

ここ数年来、寧夏回族自治区の漁業は急速な発展をとげ、一人当たりの水産物の水揚げ高は西北地区でトップとなっている。

すでに中国西北地区の万里の長城沿い地帯の重要な水産物生産基地になっている。

寧夏回族自治区で確認済みの鉱物資源は 50 余種もある。

一人当たりの自然資源の潜在価値は全国平均値の 163.5%を占め、全国で第5位となっている。

非金属鉱物資源に恵まれ、主に石炭、石膏、石油、天然ガス、陶土、石英砂岩、重晶石などがある。

石炭の埋蔵量は大きく、品種も多く、現在すでにかんがりの生産規模を形成している。

石膏の確認済み埋蔵量は 45 億ト以上に達し、全国のトップであり、一級品が埋蔵量の半分以上を占める。

同心県賀家口子の大規模な鉱床の石膏層は 20 層以上に達し、厚さは約 100 ㍎、埋蔵量は 20 トに達し、中国でまれに見る大規模な石膏鉱床である。

石油、天然ガスもかなりの埋蔵量があり、石油・天然ガスを原料とする大規模な化学工業を発展させる素晴らしい条件を備えている。

石英砂岩（二酸化ケイ素）の確認済み埋蔵量は 1700 万ト以上に達している。

そのほか、リン、火打ち石、金、銅、鉄などの鉱物と賀蘭石などがある。

環境の状況と抱える問題

寧夏回族自治区の北部はテングリ、モーウスウ、ウランブの三大砂漠に囲まれ、土地の砂漠化が深刻である。

南部の山岳地帯では谷間があちこちに見られ、水土流失がひどいが、寧夏回族自治区は長期にわたって自然環境改造の面で世界の注目を集める成果を収めている。

最新の調査によると、全自治区の砂漠化した土地の面積はすでに 70 年代の 1 万 6500 平方キ㍎から 1 万 2600 平方キ㍎に減り、23.6%下がり、中国で最初に砂漠化土地面積の減少を実現した自治区となった。

現在、自治区の林地面積はすでに約 40 万畝に増え、材木の蓄積量は 674 万立方㍎達し、森林カバー率は 50 年代の 1.3%から現在の 6.4%に上昇した。

テングリ砂漠の縁にある中衛営林場（防風、防砂を目的とする造林）で、40 数年来「碁盤式の草栽培のやり方」などのさまざまな防風、防砂のための効果的措置をとって、砂漠化した土地の減少、耕地面積の増加という奇跡をつくり、中国最初の砂漠を通り抜ける包頭—蘭州鉄道が40年余りにわたって無運休営業を確保し、国連から環境保全「世界ベスト 500」の称号を授与された。

自然生態環境を整備すると同時に、寧夏回族自治区は、工業汚染予防対策と都市環境の質の面でも著しい成果をあげた。

1991 年から 1996 年までの全自治区の工業の伸び率は年平均 11.4%に達したが、全区の環境の質は同じレベルを保った。

全区の工業廃水処理率と煙塵除去率はそれぞれ 1991 年の 38%と 86%から現在の 76.7%と 90%に上昇した。

鉄道

包頭—蘭州鉄道が寧夏回族自治区の北部と中部を横切っている。

沿海部から西北へ向う二本目のルート——中宝電化鉄道の開通によって寧夏回族自治区は「二本目のユーラシアランドブリッジ」の重要なルートになった。

現在進められている包頭—蘭州鉄道の電化改造プロジェクトが完成すると、寧夏回族自治区から東部と西部への進出はいっそう便利になる。

道路

寧夏回族自治区の道路は連続して年間 330 千キロの開通スピードで発展をとげ、全区の道路の開通距離数は 8700 余千キロに達した。

そのうちのハイグレード道路は 7900 余千キロで、中国の道路密度がわりに高い省・自治区の一つ。

区都銀川を中心とし、13 本の国道と自治区クラスの道路を幹線とし、百余本の郷クラスの道路を支線とする四方八方へ通じる道路網が形成されている。

水路

黄河の寧夏回族自治区区間の 397 千キロの主流には、黄河にまたがる道路橋が六本もつくられ、平均 66 千キロの区間に橋が一本ある。

現在、7 本目黄河道路橋が着工されている。

航空

1997 年 9 月、自治区が新たに建設したさまざまな大中型機が離着陸できる 4D レベルの現代化空港——銀川河東空港が本格的に運航を始めた。

現在、区都銀川から北京、上海、西安、広州、仏山、成都、ウルムチ、武漢、重慶などへの航空ルートが開通し、華北、東南、南西に通じる航空交通網が形成されている。

銀川市



基本情報

銀川市（別名：鳳凰城）は、寧夏回族自治区の区都で、面積は 9491K m²、三つの区（興慶区、金鳳区、西夏区）、二つの県（永寧県、賀蘭県）、一つの市（靈武市）を所轄している。人口は199万人、その内、回族の人が約40万人、約3分の1がイスラム教徒。海拔は1010～1150m、山地と平原が広がっている。

銀川市は悠久の歴史をもった、中華文明発祥の地の一つで、3万年前の旧石器時代の水洞溝遺址がある。

春秋戦国時代には秦に所属し、富平県と呼ばれ、紀元907年、唐が没落して、銀川は西夏王朝の首都となった。

明清時代には、再び寧夏府が設置され、1928年、甘粛省とモンゴル的一部分で寧夏省を作る際に、都会がおかれた。

1954年、銀川が一度寧夏省から離れ、甘粛省に入れられたが、1958年、寧夏回族自治区を設置する時に再び都会がおかれた。

雄大な賀蘭山と黄河に恵まれて、資源の豊富な銀川平原が生まれた。

多彩な多民族文化、壮観な砂漠の風光、悠久の歴史を誇る黄河文明、神秘的な西夏風情が「塞上湖城、西夏古都、回族之郷」の銀川の魅力である。

はるか昔から、銀川は行政と商業の中心として栄えていた。

銀川は、昔から農業が発達し、江南のように農、林、牧、漁業などが豊かなため、「賽上江南（長城以北の江南）」の別名も持っている。

銀川では工業がさかんではなかったが、唐代に開発された灌漑システムに恵まれ、平原が広がり、そのため物産が豊か。

この辺の主要な農業市場と配送センターであるとともに、周辺の遊牧民が飼育した家畜の売買の場所でもある。

現在、ウルムチのような西部都市或と東部との貿易の重要な要衝になっている。

松江市の姉妹都市

平成 6 年から交流を始め、平成 16 年 9 月に友好都市提携をした。

<西夏王陵>



銀川市から西へ 30kmの賀蘭山の東麓に位置し、西夏王朝歴代帝王の陵墓で、「中国のピラミット」といわれている。

西夏王朝は、井上靖「敦煌」・中国ドラマ「大敦煌」でも有名。

長さ 10 キロ、広さ 4 キロにわたる陵墓は、九つの帝王陵と 140 あまりの王公大臣の陪葬墓が作られ、敷地面積 50 平方キロメートル。

その中で規模の大きい二つの陵墓は、西夏王の李元昊（りげんこう）と彼の祖父、父のもので、すべての陵園は独立した造り、地上の陵園と地下の墓室に分かれている。

またすべての陵園は北に立って、南に向いて、門、碑亭、外城、内城、献殿、陵台からなっている。

陵台は八角形と円形の二種類、緑色の瑠璃瓦で飾られ、高さは 17m から 20m までのものがある。

西夏王陵は、すべての陵園の敷地面積は 10 万平方メートルを超え、外形は仏塔に酷似していることから、中原の方形帝王陵墓とは大きく異なっている。

陵園の建築物と陵台の表面は赤褐色に塗られ、西夏王国の規模と繁栄を伺うことができる。

西夏王陵は、明以前にすでに破壊されて、現在その遺跡しかみられないが、墓室の中からは大量の建築材料や西夏文字と漢字の石碑の破片、金銀のアクセサリ、陶磁器の破片などが出土されている。

西夏



西夏（1038年 - 1227年）は、タングートの首長李元昊が現在の中国西北部（甘粛省・寧夏回族自治区）に建国した王朝。国号は夏だが、中国最古の王朝夏などと区別するため、通例「西」の字を付して呼ぶ。首都は興慶（現在の銀川）。モンゴル帝国のチンギス・ハーンによって滅ぼされた。

歴史

起源と成立

西夏の起源は唐初にまでさかのぼることができる。

この時期、羌族の中でタングート族がその勢力を拡大していった。

その中、拓跋赤辞は唐に降り、李姓を下賜され、族人を引き連れて慶州（現在の寧夏回族自治区内）に移住し、平西公に封じられた。

唐末に発生した黄巢の乱では、その子孫である拓跋思恭が反乱平定に大きな功績を残し、それ以降、夏国公・定難軍節度使として当地の有力な藩鎮勢力としての地位を確立した。

宋初、趙匡胤は藩鎮の軍事権の弱体化政策を推進したが、これが夏国公の不満を引き起こした。

当初は宋朝に恭順であった平西公であるが、次第に対立の溝を深め、1032年に李德明の子である李元昊が夏国公の地位を継承すると、次第に宋の支配から離脱する行動を採るようになった。

李元昊は唐朝から下賜された李姓を捨て、自ら嵬名氏を名乗り、即位翌年以降は宋の年号である明道を、父の諱を避けるために顛道と改元し、西夏独自の年号の使用を開始している。



その後数年の内に宮殿を建設し、文武班制度を確立、兵制を整備するとともに、チベット語系のタングート語を表記するための独自の文字である西夏文字を制定した。

即位の翌年からは、長年の宿敵である青唐のチベット系勢力を攻めて決定的な打撃を与え、さらに 1036 年には宋の支配下であった、河西地方西部の肅州・瓜州・沙州に兵を進めて制圧した。

またチベット系をさらに牽制するため、蘭州近郊へ兵を送った。

そして 1038 年 10 月 11 日に皇帝を称し、国号を大夏として名実ともに建国するに至った。

建国初期から全盛期

西夏は建国後、遼と同盟し宋に対抗する政策を採用し、しばしば宋内に兵を進めている。

この軍事対立は 1044 年の和議成立（慶暦の和約）まで続いた。

宋との和議では、宋が西夏の地位を承認すると共に西夏が宋に臣従する代償として莫大な歳幣を獲得した。

しかし、同年に西夏と遼の間で武力衝突が発生すると、西夏は宋・遼と対等な地位を獲得するに至った。

ただ、宋との和議成立後もたびたび局地的な戦闘が続き、宋は西夏との国境に軍隊を常駐させていた。

李元昊の死後、2 歳にも満たない息子の李諒祚が即位し、その母である没蔵氏による摂政が行われた。

この時期遼による西夏攻撃が行われ、西夏は敗北、遼に臣従する立場となった。

1063 年、吐蕃の禹蔵花麻が西夏に帰属した。

皇帝である李秉常の母である梁氏はこの時期宋に対する軍事行動に出るが失敗、国政は李秉常の元に帰属するようになった。

しかし李秉常の死後に 3 歳の息子である李乾順が即位すると、梁氏は再び摂政を開始、宋や遼に対する軍事行動を起こしている。

李乾順の親政が開始された後は遼や宋との和平政策へ転換し、軍事行動は年々減少、西夏の社会経済が発展していくこととなった。

1115 年、金が成立すると遼に対し侵攻を開始した。

1123 年、遼天祚帝は敗戦により西夏に亡命、同時に金の使者も来朝し李乾順に対し遼帝の引渡しを求めた。

李乾順は遼の復興は困難と判断し金の要求を受諾、これにより西夏は金に服属することとなった。

そして金により北宋が滅ぼされると、西夏は機会に乘じ広大な領土を獲得することとなった。

李乾順の死後は息子の李仁孝が即位した。

この時期西夏国内では地震と深刻な飢饉が発生し民心が乱れ、各地で農民蜂起が発生した。これに対し李仁孝は国内に各種改革を行い、社会経済の発展と、社会の安定に努めた。

衰退

李仁孝の死後は、息子の李純祐が即位したが、この時期になると政治腐敗が進み、国勢は凋落の一途を辿っていた。

その状況下の 1206 年、親族の李安全が帝位を篡奪し李純祐を殺害、それまで金に依存した外交政策を見直し、当時強大な勢力を誇ったモンゴル族に依存する政策を採用した。

李安全は金に対し十余年に及び軍事行動を発動した。

この軍事行動は金のみならず西夏の国力を疲弊させるものであり、また飢饉などで貧困が続いていた民衆の離反を招き、また政治腐敗のみならず、皇帝自らが酒色に溺れ朝政を省みない状況で国内は一層不安定なものとなっていた。

またモンゴルに依拠した外交政策も、西夏の安全を保障するものでなく、1205 年にはモンゴルは西夏侵攻を開始、1209 年までに 3 次に亘る西夏出兵ですでに国力は限界に達した。

1211 年、西夏で宮廷クーデターが発生、李遵頊が帝位を篡奪した。

しかし中興に影響を与えるものでなく、西夏の国力は下降線の一途を辿った。

1216 年、西夏はチンギス・ハーンの出兵要請を拒否する。

その行為はモンゴル側の怒りを招き、1217 年に第 4 次西夏遠征が行われるに至った。

1223 年、李遵頊は自らが亡国の君主になることを避けるため、太子の李徳旺に譲位した。

西夏は李安全及び李遵頊で滅亡寸前の国力となっており、李徳旺の登場で復興できる状態ではなかった。

李徳旺はモンゴルに対抗するため、チンギスが西征した機会を狙ってモンゴルを攻撃しようとしたが、事前に情報がモンゴル側に漏れ、1224 年にモンゴル軍により都銀川が包囲されるとモンゴル軍に投降、人質を送ることで滅亡することはわずかに免れることができた。

1226 年、李徳旺が病死し、李睨が皇帝に推挙されたが、翌年李睨はモンゴルに投降、その後李睨は毒殺され西夏は名実共に滅亡した。

西夏文字

西夏王朝（1032年～1227年）初代皇帝李元昊の時代に制定された文字。

長らく未解読であったが、日本の西田龍雄によってほぼ解読がなされた。

漢字と、それを作った漢族を強く意識して作成されており、中国人を表す「漢人」に当たる文字は「小偏に虫」という文字で表記される。今昔文字鏡に登録されている。

概要

6,000文字ほどの文字数を持ち、冠や偏・旁等漢字に似た構造を持つ。

基本的に一字一音節である。

漢字とは異なり象形文字起源ではないため、各構成要素がどのような起源で作られたのかは定かではなく、要素のあらかず意味が全て解明されている訳ではない。

字全体での意味は判っていても、なぜその要素を使用しているのか不明の文字も多い。

契丹文字の一部の字形と近い要素も存在するが、関連は明らかにされていない。

八達嶺の手前に位置する居庸関に、雲台と呼ばれる過街塔がある。

塔自体は元末明初に損壊したが、下部のトンネルの左右両壁には、建立の由来などが6種の文字で刻まれて残っている。

このうち5種類の文字については、それがランツァ文字（梵語）、チベット文字、パスパ文字（蒙古語）、ウイグル文字、漢字であることは以前からわかっていた。

しかし、残りの1種は、長い間不明のままだったが、実は「西夏文字」という文字であることが判明したのは、19世紀になってからだった。

20世紀初頭、ロシアのピョートル・クズミッチ・コズロフが、カラホト（ハラ・ホト、モンゴル語で“黒い城”を意味する）遺跡を発見した。

コズロフはこれがいつの時代のどの国の遺物かわからなかったため、これをロシア学士院に送ったが、その後のロシアでの研究から、これが西夏の重要な遺物であることが明らかとなった。

遺跡の重要性を認識した彼は、調査の復路にあたる1909年に再びカラホトを訪れ、2000点を上回る文書類のほか、約300点を数える仏画など、西夏の遺物を大量に収集した。

これにより、これまで不明だった西夏の社会や文化の実態が解明された。

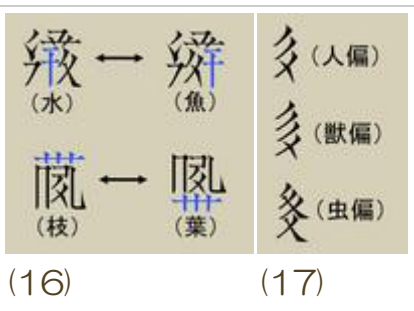
西夏文字からうかがえる西夏人の思考方法

コズロフ収集品の中には、西夏語と漢語の対訳単語集である『蕃漢合時掌中珠』や、西夏文字で西夏語の発音を示した『同音』等の字典類など、西夏語・西夏文字の研究にきわめて有用な文書があった。

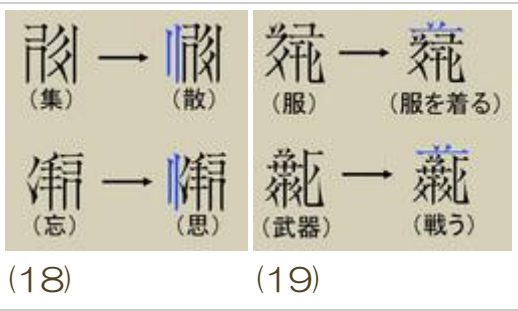
また翻訳が盛んだった西夏では、漢語やチベット語の仏典や、『論語』『孝経』『孫子兵法』など中国の古典を西夏語に翻訳したテキストも豊富に存在した。これらの文書が、西夏語を解説、研究するうえで大いに役立ち、ロシアのイワーノフやネフスキー、中国の羅福成といった人々が西夏文字の研究を精力的に進めていった。

しかし、西夏語・西夏文字の解説と研究を決定的に前進させた人物といえば、日本の西田龍雄をおいて他にない。西田の研究によれば、西夏文字の数は六千百数十字にのぼり、表意文字を主体とするところに特徴があるという。

漢字の「山」や「川」といった象形文字はほとんどなく、ある概念をいくつかの意味単位に分析し、それぞれの意味をあらわす文字要素を組み合わせることによって一つの文字を表現する。このような文字要素は全部で 350 種、組み合わせの方式は 44 あることが確認されている。



漢字の偏や旁につづじる構成法もあるが、西夏文字には他に、同じ文字要素から成っているながら、上下あるいは左右の配置を逆にすることで、別の意味をもたせるものがある（「水」と「魚」、「枝」と「葉」⁽¹⁶⁾）。

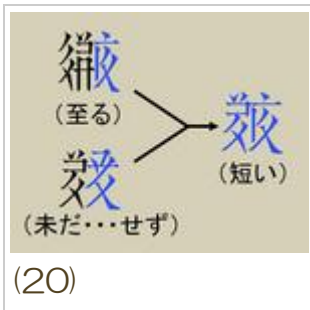


また西夏文字では、意味の近い文字要素は、字形も近似するという特徴（人偏、獸偏、虫偏⁽¹⁷⁾）があり、部首の中には、否定偏という漢字にはない意味範疇をあらわすもの（「集」と「散」、「忘」と「思」⁽¹⁸⁾）や、名詞を動詞化する役割をもった冠（「服」と「服を着る」、「武器」と「戦う」⁽¹⁹⁾）などもある。

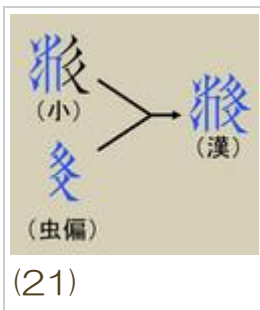
このように西夏文字は、意味の組み合わせによって一つ一つの文字が形作られ、しかも全体として実に合理的かつ組織的に構成されているため、それらを意味の連想によって読み解いていくことが可能となる。

こうした丹念な解読作業によって、その背後に働く西夏人の思考方法を探ることができるということも、西夏文字研究の大きな魅力となっている。

たとえば、漢字の「鈴」や「鐘」はいずれも金偏であって、金属製であるという意味範疇で括られているのに対し、それらに対応する西夏文字は音偏で、音を出すものという意味範疇での括りになっているのもその一例である。



また、「短い」という文字⁽²⁰⁾の偏は、「未だ…せず」の偏と同じで、旁は「至る」と通じ、字形の構成からみると「未だ至らない」というのが「短い」ということになり、そこにも漢字文化とは異なる発想を認めることができる。



また西夏人の思考の一端をうかがわせるのが、「漢」という文字⁽²¹⁾である。これは小偏に虫という組み合わせになっている。むろん、これは中国に対する対抗心を象徴的にあらわした蔑称であるが、ここに西夏王国の自負——中国を凌駕する存在としての自己認識——をみることもできよう。

文字考案ブームが語る民族意識の高揚

西夏王国が存在した時代に、中国を支配していたのは宋であるが、この国は軍事力が弱かったために版図が小さく、その周囲には強大な異民族国家が栄えていた。

西夏と前後して現れた遼（196～1125）や金（1115～1234）などは国家として強い基盤を築いており、とりわけ遼は、宋との間に対等な外交関係を結ぶまでに成長し、高い文化水準を有していた。

もはや中国は、かつてのような絶対的な存在ではなくなっていた。このような時代を背景として、宋周辺の異民族国家では、自分たちの民族にたいする自負が膨らみ、民族意識が高まっていったのである。

西夏を建てたタングート族も、もともとは吐蕃と吐谷渾の間にはさまれて四川省の西部あたりに雑居していた小部族であった。

唐末に吐蕃に圧迫されて北東に移動し、黄河の大屈曲部の南側（河套、オルドス地方）に移り住んだが、五代宋初にいたるまでは常に中国側に味方することで勢力を拡大し、酋長は唐室より李姓を賜るほどであった。

ところが力をつけたタングート族は、李繼遷の代に宋に反旗を翻し、その孫にあたる李元昊は1032年ついに独立を果たす。

そして、都を興慶府（現在の銀川）に定め、東西交通の要所である河西回廊を領有して繁栄を誇った。

西夏文字を建国事業の一つとして制定したのもこの李元昊である。

タングート族と、それを率いる若く国粋主義的な情熱をもった李元昊は、ついに中国への服属から抜け出したことに民族意識の高揚を感じていただろう。

このような民族意識の高まりにつれて、漢字に対抗して新しい文字を作り出すことは、自分たちの文化の独自性を示す象徴とみなされるようになり、文字の考案は宋周辺諸国では一種のブームになっていった。

自分たちの文字を作り出したのは、なにも西夏王国だけではない。

遼は契丹文字を、金は女真文字を作った。

こうしたブームを作り出した遠因には、唐代中国北方に大帝国を築いたトルコ系の回紇（ウイグル）の影響があったことも無視できない。

回紇は唐末に北方のキルギス族の侵入を受けて壊滅してしまい、その瓦解によってウイグル人は東西に分散した。

東方に逃れたウイグル人は遼の領土内に流れ込んだ。

そして、漢字とはまったく系統を異にするウイグル文字を使用していた彼らに接したことが、やがて契丹民族の民族的自覚を引き起こした一つの大きな要因になったと考えられている。

契丹文字には、遼の太祖、耶律阿保機（やりつあぼき）がつくった契丹大字と、皇子の迭剌（てつらつ）がつくった契丹小字があるが、小字は字形が漢字に酷似するにもかかわらず、ウイグル文字をもとにした表音文字が多く、ここに契丹文字の制定におけるウイグルの影響をみることができる。

一方、西方に逃れたウイグル人は天山南路の諸国に侵入し、それまで連綿と息づいていたイラン系の文化を完全に駆逐してしまった。

いわゆるウイグル化と呼ばれるこの変動は、タリム盆地の歴史上で最大の変化であった。

イラン系の人々が住んでいたこの地域が、“トルキスタン”（トルコ人の住むところの意）と呼ばれるようになったのは、この時からである。

このようにウイグル人は回紇の瓦解によって分散し、東方においては契丹から西夏、金、さらには蒙古族の元や満州族の清にまでいたる、民族主義の火付け役となったのであった。

一方、ウイグルの大部族は西方に流れて天山南路の諸国に侵入し、それまでイラン系の民族がイラン系の言語を使用していたこの地をウイグル化している。

現在なお、この地が“トルキスタン”と呼ばれるのは、この時からである。

西夏は、こうしたウイグルによって引き起こされた大変動の中に興起した国の一つでもあったということになるだろう。

<海宝塔>



海宝塔寺は銀川市の北西 1.5 キロのところのところに位置し、清の時代末期～中華民国の時代初めには「海宝禅院」と呼ばれていた。

別の名を赫宝塔、黒宝塔ともいい、中国の古代建築の傑作。

建てられた時期は不明で、公元 5 世紀初頭にあった 16 の国のうちのひとつである夏国の国王、赫連によって再建された。

現在のものは清の時代に発生した 2 回の地震の後、再び修繕されたもので、11 階部分は乾隆帝のときに再建された。その際、少し手を加え、塔の内部に最上階までのらせん階段を設えた。

四角形の 9 階建の総数 11 層あるレンガ製の楼閣の塔で、高さ 53.9 メートルある。

塔は広々とした四角形の土台に建てられており、土台の高さは 5.7 メートル、一辺の長さは 19.7 メートルある。

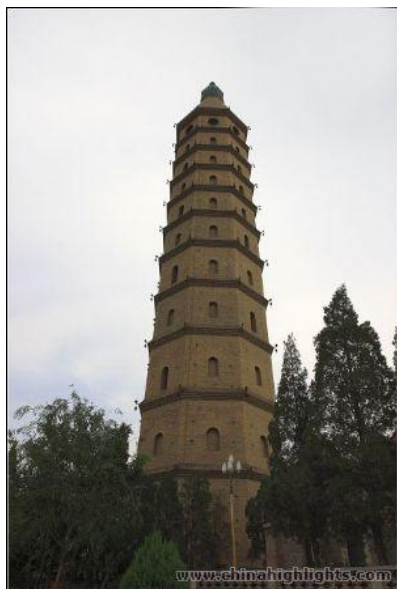
土台の四方には青いレンガで造られた花壇があり、また東側の中央には塔座門への石階段がある。

塔の上からは銀川の姿が一望でき、海宝塔と市内にある承天寺が相対する姿は『寧夏八景』のひとつになっていて、“古塔が空高くそびえる”との誉も高い。

塔内には上から下まで通り抜けられる四角形の空間があり、それぞれの階層は木の板で隔てられており、木の階段に沿って頂上まで登ることができる。

塔の外壁の角々に風鈴が釣り下げられ、風が吹くと鈴の音が響く。

<承天寺塔>



銀川市の西側にあり、「西塔」とも呼ばれている。

1050年に建てられた西夏王朝の重要な仏教寺院であり、当時、お参りに訪れる参拝者が多く、武威の護国寺、張掖の大仏寺と並ぶ仏教聖地として崇拝されていた。

西夏の開国皇帝李元昊の死後、その幼い子が帝位につき、皇太后はその子の長寿と李家天下及び西夏の永久的な安定を祈るために、承天寺と仏塔を作った。

清の乾隆3年、地震より壊れ、現存するのは清の嘉慶25年（1820年）に再建されたものだが、西夏の建築風格はそのまま保存されている。

承天寺塔は密檐式の八角形のレンガ作り、11階の建物で、高さは64.5m、西安の大雁塔より0.5mを上回っている。

主体の部分は高さ2.6m、長さ26mもある四角形の土台の上に建てられている。

塔の門は東の方向に面していて、幅4.8mの通路を通じて塔室に入る。

塔室は四角形の空間を現し、室内は各階が木材造り。

1階～3階は窓がないが、4階～10階には1階ごとに交替でアーチ型の窓が設けられている。

最高層には4つの方向に向かって大型の丸型の窓があり、快晴の時には、天と地の繋がるところに一筋の黄河が見える。

2006年、清の時代の古建築として、全国重要文化財保護単位に選ばれ、院内には博物館や、古建築展示室が増設され、寧夏の歴史、民族と軍事などに関わる数多くの貴重な文化財が収蔵されている。

<賀蘭山岩画>



寧夏回族自治区 銀川



銀川市から56キロの所にある、南北200キロにわたり広がる賀蘭山の山腹には、およそ20か所の壁画が残っていて、その中でも最も代表的なものが賀蘭山壁画である。

中国雲南、広西地方では、壁画、崖画と言えれば大体が顔料を使って書かれたもの、特に赤を使ったものを指すが、東北部と同様、賀蘭山の「壁画」は岩彫刻である。ただし、賀蘭山にある多くの壁画のうち、白芨溝だけは顔料を使って書かれている。

壁画には太古の昔、3千年～1万年まえの人間の暮らし、狩猟、祭祀、戦、娯楽などの場面が描かれている。

また、羊、牛、馬、蛇、虎、豹などの動物の絵や抽象的な記号もあり、これらは原始氏族部落の自然崇拜、生殖崇拜、トーテム崇拜、祖先崇拜などを表わしており、中国人類文化史、宗教史、原始芸術史の上で、文化財的価値が高い。

1997年、国連国際岩画委員会に非公式の世界文化遺産名簿に選ばれ、2006年1月には中国国内の建設部によって中国国家自然文化遺産に選ばれ予備名簿に名を連ねている。

賀蘭山の壁画は、場所によって異なる内容になっている。

岩画の図形と西夏彫刻の記号から見ると、賀蘭山の壁画は異なる時期に相次いで刻まれ、大部分は春秋戦国時代の北方遊牧民族によって造られ、また他の時代や西夏時代に造られたと思われるものもある。

すなわち賀蘭山岩壁画は、古代北方諸民族が代々共同で作り出した芸術と言え、珍しい民族芸術画廊とも言える。

<銀川国家湿地公園>



銀川国家湿地公園は、2006年に中国国家林業局の許可を得て正式に創設された。中国で江蘇省の溱湖と杭州西溪国家湿地公園に次ぎ、三番目の国家湿地公園で、西部地区及び黄河流域初の国家湿地公園で、「中国で最も美しい六大湿地公園の一つ」と称されている。

銀川国家湿地公園は、閩海と鳴翠湖という二つの園区に分けられる。そのうち、銀川閩海湿地公園は、銀川市金鳳区の北西部に位置し、市の中心部から約3km離れている。湖と沼沢と草原からなっており、総面積は2100ヘクタールで、銀川市で面積が最大、また原始地貌が最も保存されている湿地である。

水生の植物はヨシ、ガマを主として、植物は114種、鳥類は107種。忠告国家重点保護野生動物20余種で、中国西部地区鳥類移動の中継地の一つとなっている。園内は、水域が広く、河がくねくねと蛇行して自然風景に恵まれているので、「銀川の腎臓」、「都市の緑の肺」と誉められている。

一方、鳴翠湖湿地公園は、銀川市興慶の東部に位置し、西側は市内から9km、東側は黄河から3kmに離れていて、総面積は667ヘクタール。鳴翠湖は南湖と北湖に分かれていて、南湖は鳥類保護区で、鳥類97種が生息している。北湖は、湿地エコツアーや、十大見所が開発されている。

鳴翠湖は文化の蓄積が厚く、その上に自然風景が美しく、重要な生態、歴史、文化、科学研究及び科学や教育の普及に高い価値を持っている。

< 黄沙古渡（横城古渡） >



黄沙古渡は寧夏の八景の一つ、明清時代盛んだった渡し場である。
明代に建てられ、【明清靈武八景】のひとつで、約 500 年の歴史がある。

銀川市興慶区月牙湖郷に位置し、銀川市街地より 25 キロ離れている。
27 キロの範囲には、黄河風景、砂漠風景、湿地風景、湖、田園風景などの風景が一体になっている。

<回郷文化園>



中華回郷文化園は、イスラム文化を愛した信者が政府の支援のもとに、2001年に建設した国内唯一のイスラム民俗を展示しているテーマパーク。

銀川市市内から車で30分の距離にあり、白を基調としたイスラム建築群で構成されている。

メインゲートはインドのタージ・マハルを模している。

そのゲートをくぐって中に入ると、正面には中国回族博物館がある。

豊富な資料と貴重な実物、模型などで回族の歴史や文化を詳しく紹介しており、興味深い展示も多い。

園内の建築様式は全てイスラム教の名建築から借用していて、中国回族博物館、回族礼儀大殿、民俗村、演芸大殿、レストランなどがある。

南関清真大寺



銀川南関清真大寺は、アラビア風で民族の特色を持つ建物で、銀川市の回族の人々が宗教活動を行う中心的な場所。

毎週の金曜日、或いは毎年回族の伝統的な祝日になると、何千万のムスリム(イスラム教徒)はここに集まってきて礼拝する。

この寺は、明の時代末ごろに創建されたと言われている。

「文革大革命」期間中、一度壊されましたが、1981年8月に再建された。

主体部分は上層と下層に分けられ、上層には大礼拝堂とベランダが設けられている。

下層には浴室、小礼拝堂、女性専用の礼拝堂、アラビア語学校、僧侶の寝室、事務室、応接間などがある。

その中で、大礼拝堂は四角形で、長さ幅とも21m、1300人が礼拝を行うことができるという広さ。堂内には大きな宮灯19個が掛っている。

大礼拝堂の前にある噴水池の両側に、それぞれ高さ30mの宣礼塔が立っていて、自治区のシンボルになっている。

水洞溝遺跡



水洞溝遺跡は、中国では最も早く発掘された旧石器時代遺跡の1つで、黄河地域で唯一正式に発掘された旧石器時代の遺跡

霊武市臨河鎮に位置し、銀川市から西へ約 19 km 離れた所にある。

寧夏の霊武市と塩池県が接する所にある宝塔から始まり、明長城の南側に曲がって芒哈図を經由し黄河の主流へと流れこんでいる。

全長は 60 km、流域面積は 950 km²。水洞溝の幅は 50-200m、深さは 6-14m。両側は茶褐色のカルシウムの土が分布している。

河沿いに泉が湧き出し夥しい小さな穴が形成されていたことから、「水洞溝」と名づけられた。

1988 年に中国国務院により「全国重要な文化財保護単位」に指定され、「中国先史考古の発祥地」と誉められている。

三関所の明長城



寧夏回族自治区 銀川

三関所の明長城は銀川市から西へ40キロほど行った所、賀蘭山南部にある。この関所は、寧夏と内モンゴルのアラ善左旗(アラゼンサキ)の境に位置し、銀川から巴彥浩特鎮(バヤンホト)までの高速道路が関所を通過しており、関所からは古い長城の姿を見ることができる。

明の時代には内モンゴルの鞑靼(タタール人)や瓦剌(オイラト族)は、内モンゴルのアラゼンサキから賀蘭山の赤木口(現在の関所)に入り、各地の平野へ侵入していた。

明の時代の統治者は、辺境の安全を守るために三関所で長城(明代には「城壁」と呼ばれた)を築き、関所を設置し、古代銀川の城壁警備「四陔」の一つにした。東から西に向かって「第一」、「第二」、「第三」と3か所の関所を設けた。

第一の関所には中門も無く、「百頭の馬をも収容できる」といわれるほどの広さ。関所の両側の曲がり角には城壁を跨いだ四角のトン台を築き、壁面が2メートル、上部の平面部分が3メートル高くなっている。南北の城壁は長城とつながり、北側の城壁は山脈に沿って西に延び、南側は東南方向に延びている。城壁の高さは7メートル、土台の幅は6メートル、上の部分の広さは3.2~3.5メートル。

第二の関所は広さが11平方メートル、高さ8メートルの黄土と土砂を固め造られ、石台の南西には段階があり、上まで登ることができる。

第三の関所は、両脇を山に挟まれ、溪谷深く「一人が関所を守れば万人も陥落させることができない」といわれるほど地勢がきわめて険しく攻めにくいところにある。関所が造られた当時は山に沿い、石の長城と深い堀が一体となっていた。現在では大きな道が切り開かれているが、依然として険しい姿を残している。

玉皇閣



寧夏回族自治区 銀川

玉皇閣は銀川市の東街にあり、『朔方新志』により明代洪武年間に創建された民族風の建築。閣内に道教の上帝「玉皇大帝」の彫塑があるのでこの名が付けられた。

1954年に改修され、土で固められた楼台は長方形を呈し、高さが19メートル、東西の長さが37.6メートル、南北の幅が25メートルある。

その上に煉瓦を積み上げて楼閣は築かれ、高さ約22メートル、屋根の四隅が天に向かってそびえ立っている。

井上靖 『敦煌』

<あらすじ>

11世紀の北宋。

趙行徳は科挙の最終試験殿試を受けるため首都開封にいた。

趙行徳に出された問題は「西夏対策を述べよ」であったが、西夏が単なる辺境だと思っていた趙行徳はまともに答えることが出来なかった。

試験に落ちた趙行徳は、失望感のあまり自暴自棄になっていた。次回の科挙は3年後...

その趙行徳が、ひょんなことから街で西夏の女を助けることになる。

その礼として、西夏への通行証をもらった。西夏の文字に興味をもった趙は西域へと旅立つ。

灼熱の砂漠を尉遲光の隊商と共に歩いていたが、途中で西夏軍漢人部隊の兵士狩りに会い、無理矢理入れられてしまう。

隊長の朱王礼は文字の読める趙を重用した。朱王礼に拾われて、漢人部隊の書記となったのだ。

辺境だとばかり思っていた西夏は、シルクロードの拠点として仏教文化の華開く砂漠のオアシスだった。

漢人部隊がウイグルを攻略した際、趙行徳は美しい王女ツルピアと知り合い恋におちた。

二人は脱走を試みるが失敗、趙行徳は西夏王・李元昊の命令で都へ文字の研究に行くことになった。ツルピアの庇護を朱王礼に託し留学することとなった。

月日は流れた。

留学期間が延び、ようやく西夏に戻ったときには、ツルピアは既に西夏の皇帝李元昊によって見出され、カズクで妻にさせられようとしていた。その輿入れの日だった。

趙行徳も朱王礼にもどうすることもできなかった。婚礼の席上、ツルピアは隠し持っていた剣で謀反を企てようとするが李元昊に見破られ失敗、そのまま城壁から身投げしてしまう。秘かにツルピアに思いを寄せていた朱王礼の怒りは爆発し、敦煌府太守・曹を味方につけて李元昊に謀反を起こした。

敦煌城内で死闘を繰りひろげる漢人部隊と西夏軍本部隊。

初めは漢人部隊が優勢だったが敦煌城に火矢が放たれ、朱側は火に包まれた。

戦うことより文化遺産を戦火から守ることに使命を見出していた趙行徳は、教典や書物、美術品などを城内から莫高窟へ運び込んだ。

中国の世界遺産

文化遺産

- 万里の長城
- 北京と瀋陽の明・清王朝皇宮
- 莫高窟
- 秦始皇帝陵
- 周口店の北京原人遺跡
- 承德避暑山荘と外八廟
- 曲阜の孔廟、孔林、孔府
- 武当山古建築
- ラサのポタラ宮の歴史的遺跡群
- 廬山
- 麗江古城
- 平遥古城
- 蘇州古典園林
- 頤和園
- 天壇
- 大足石刻
- 青城山と都江堰
- 安徽省南部の古代集落群-西遞と宏村
- 龍門洞窟
- 明・清王朝の皇帝墓群
- 雲崗洞窟
- 高句麗前期の都城と古墳
- マカオ歴史地区
- 殷墟

- 開平楼閣と村落
- 福建土楼
- 五台山
- 登封の“天地之中”歴史建築群
- 杭州西湖の文化的景観

複合遺産

- 泰山
- 黄山
- 峨眉山と樂山大仏
- 武夷山

自然遺産

- 九寨溝
- 黄龍風景区
- 武陵源
- 三江併流
- 四川省のジャイアントパンダ保護区
- 中国南方カルスト
- 三清山国立公園
- 中国丹霞

